氏名・(本籍地)	張　堂　興　志（福島県）
学位の種類	博士（仏教学）
学位記の番号	甲第48号
学位授与の日付	平成20年3月15日
学位論文題目	**天台大師教学の基礎的研究 －教相論を中心として－**
論文審査委員	主査　多　田　孝　正 副査　多　田　孝　文 副査　塩　入　法　道

張　堂　興　志氏　学位請求論文審査報告書

「天台大師教学の基礎的研究
－教相論を中心として－」

論文の内容の要旨

本論文は三篇より構成される。第一篇は三章から成るが，第一章は「通別五時攷－天台疏と吉蔵疏をめぐって－」である。前提となるのは，天台教相論とは五時八教判といわれ，中国仏教の教判史上最も完成されたものとして位置づけられていることである。ここで「通別の五時」について論じられるが，40年ほど前から，しばしば文献学的見地から三大部成立の問題点が指摘されるなかで，天台大師智顗の教学の主要なものが，三論宗の吉蔵に依って成立しているかの如き論考が，一部の学人の間で盛んであった。筆者はそのような恣意的な論を放置しておくことは問題であるとの立場で，天台教相論の正当性を主張した。

第二章は「天台大師の大小乗観に関する見解をめぐって」である。天台教学では通常「三蔵教」と呼ばれる小乗仏教に対し，従来の天台学の入門書などでは，天台大師智顗は小乗に対して辛辣な批判をしていた，とみなされている。しかし天台大師智顗の独自の大小乗観が把捉されていたこと，併せて智顗における大乗の定義について論及している。

第三章「秘密不定教の再考察」は，秘密不定教が経典中に文字として確認できないものを指すという仮説が提唱され，吉蔵や法雲といった天台大師智顗と同時代の学者の「秘密」の五義についても比較を試みている。

第二篇「天台三大部の文献上の課題をめぐって」は五章より成る。ここでは主として三大部に説かれる被接説が中心に論じられ，天台大師智顗親撰と判定されている維摩経の注釈書などにより，天台大師智顗と章安尊者の立場の違いが述べられる。特に本来は三蔵教に対して柔軟な立場を取るはずの天台大師智顗とは異なる，章安尊者個人の小乗仏教に対する辛辣なまでの表現が，三大部中に綯い交ぜにされているため，あたかもこれが天台大師智顗の主張であるとして，誤って読者に理解される危険性を指摘する。そこで三大部の被接説が章安尊者によって纏められたであろう根拠が多角的に示され，三大部中における大乗

と小乗との境界線を厳密に引いた前提で論じられる教義が , 智顗の預かり知らぬところで三大部中に存在している可能性があり , その最たるものが被接説であると論じている。

第三篇「天台大師の人間観と教学」については , 天台大師教学においてあまり重要視されていない , 本迹思想に基づく行人や諸経論の把捉について論じられている。当時の中国仏教界における教判思想の確立過程で , 兎角排斥される傾向にあった小乗や声聞を , 天台大師智顗は法身菩薩の垂迹と捉え , 阿毘曇論などの論疏に関しても仏説と同等の文献として , 積極的に把捉する姿勢が認められる。特に筆者は「普現色身三昧」などが , 天台大師智顗独特の実相観を支える基盤であるとしている。このようなことから天台大師智顗における実相観を , 本迹思想の視点より『法華玄義』などによって考察することで , 天台大師教学に対する筆者の見解が , 新たに提出されている。

審査結果の要旨

二十数年前 ,『法華文句』の成立に関して , 嘉祥大師吉蔵の『法華玄論』と対比しながら ,『法華文句』は章安尊者が吉蔵の著作を依用して編集したものである , という研究が発表された。

このことは , 天台教学の外では古くから論じられてきたことで ,『国訳一切経』の法華文句の脚注に , 吉蔵の著作の文章と同文の箇所が明示されていることからも判る。更にこの節が展開して , 章安尊者は思想も吉蔵から借用したという学説も登場した。

実際 , 天台大師智顗の「法華三大部」は , 智顗講説・章安尊者筆録とされる。天台系の学者は三大部を金科玉条のものとし , 一字一句批判せずに用いることを旨としてきた。しかし , 天台大師智顗にも章安尊者にも各々親撰書が存在するので , しばしばそれらの間には齟齬が垣間見えるのである。

本論はその点に注目し , 三大部の中の特に被接説 , 不定教の扱い , 大小乗への認識などに関して , 天台大師智顗と章安尊者の仏教理解の差異を明らかにしようとしたものである。

本論は , はじめに通別五時に関心を寄せ , 近世の教学書では , 別の五時を正意とすることに対し , 中古天台の文献に通の五時を強調するものが存在することに注目する。更にこれを秘密不定教との関連において考察し , 同聴異聞と一般的に解釈することへの疑問を抱くことによってスタートする。

そして第一に ,“ 法華とは顕露で秘密ではない ” と論じられている点について , 顕露とは経典中に明文化されている事柄を指し , 秘密は経典中に文字として確認できないものを指すということをつきとめ , この視点から天台大師智顗が経証として確認できない “ 阿含経における二乗の無生法忍獲得 ” ということに関し ,『堤謂波利経』・『涅槃経』の毒発喩を根拠に秘密不定教を創唱したことを突きとめ , 大小乗経や声聞 , 縁覚 , 菩薩を同等に見ようとする天台大師智顗の積極的経典観を知ることになる。

この知見を基として , 被接説の “ 小乗である蔵教の行人は法華で開会されるまで一切被接を論ずることはない ” とする三大部の被接説に眼を向けることになる。

古くは六祖荊溪大師が七種二諦は章安尊者の手に依って纏められた , という指摘があるなど , 被接説には看過できない問題がある。

天台大師智顗の教学思想には , 蔵教が被接する可能性について , 充分それが認められ , 秘密不定教の創唱などとも軌を一にしているのに対し , 章安尊者は , 小乗に対してかなり辛辣な語を述べる側面があり , 天台大師智顗が小乗三蔵教を円教の立場から包容的に論じるのとは異なる思想を有していた可能性が指摘出来る , と論ずるのである。この試みのほとんどは一応の成功を見たといえよう。

抱いた発想を文献に忠実に精査し , 主張出来ることはなかなか困難なことである。文献が発想に取り込

まれたり , あるいは逆の場合も往々に生じ易いのであり , 注意深く研究を進めて欲しい。更にこの先 , 天台大師智顗 , 章安尊者 , 吉蔵をめぐって思想および文献に関して大きな展開がもたらされることを予想させる試論である。

しかし , 宗学の厚い壁にあたることもあるであろう。勇気をもって研究の完成へ進んでもらいたい。